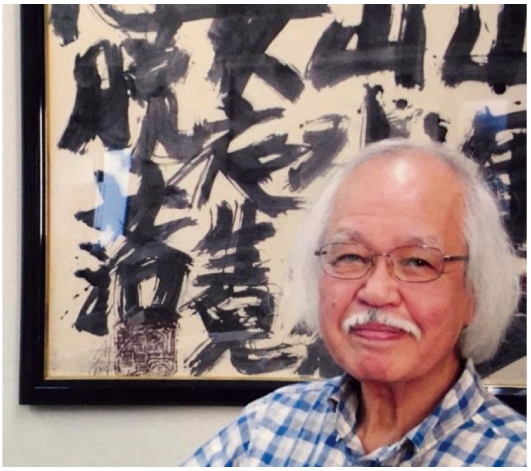
牛窪梧十（うしくぼごじゅう）氏　書家


書斎には須田剋太の書も

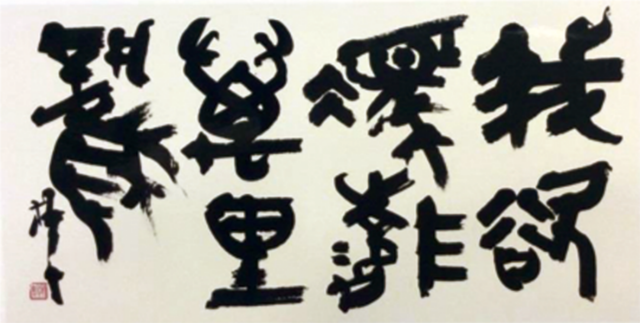
1. 経歴・狭山市とのかかわり

1945(昭和20)年生まれ、1970年から狭山市水野に在住。入間郡三芳村で生まれ、静岡県で幼少期を過ごす。富士山と武蔵野が心の原風景である。埼玉県立川越高校書道部で書道にのめり込み、西川寧の『書の変相』に多大な影響を受けた。その後、東京教育大学で書を専攻し、西川先生に直接師事する。また早くから興味を持っていた篆刻は、高校の先輩でもあった小林斗盦に師事。必要不可欠な文字学は白川静の文字学を独学する。大学卒業後は川越高校、豊岡高校、飯能南高校で25年間勤務。2000年から大東文化大学書道学科の講師となり、70歳まで教鞭をとる。2013年2月に開催した牛窪梧十書展は初めての個展であったが、その質と内容で注目を集めた。また、毎年日本橋の好文画廊で開催している成和書展は、漢字五体だけでなく、かな、篆刻もあり、参考品も陳列するなど幅広い展示で好評を得ている。

2. 主な業績

謙慎書道会展、読売書法展、日展などで受賞を重ね、役員・審査員も務めている。現在は、日展会員(審査員2回)、読売書法会常任理事・執行役員、謙慎書道会事務局長、全日本書道連盟理事、全国書美術振興会監事を務めている。成和書会を夫妻で主宰。 主な著著には、書学大系〈鄧石如〉(同朋舎出版 1984年)、標準篆刻篆書字典「篆書にしたしむ本」(二玄社 1987年)、作品に学ぶ墨場必携〈篆書〉(同朋舎出版 1994年)、古典の新技法〈5〉六朝楷書(二玄社 1998年) などがある。

3. 特筆


「我は万里の風に憑陵せんと欲す」

牛窪氏が書き続ける「金文」は、中国の殷周時代の青銅器の銘文の文字で、現在も発掘が続き研究が進められている。この漢字の最初の姿に魅せられ、白川静の文字学を手がかりに、現代の造形芸術として作品化しようと追及を重ねている。その着実な努力が認められ依頼を受けて作った『標準篆刻篆書字典』は、発売後すぐに台湾で海賊版が出されたほど有用で、全国の高校にも配備されている。また『今昔文字鏡』というコンピュータソフト用の篆書約1万字を書いたこともあるという。近年は、研究と趣味を兼ね蒐集してきた拓本や書籍、古人の書画等、機会を得ては公開・展示することも心がけており、科学が進み過ぎた感のある現代社会への違和感を噛みしめながら、人間として大事な忘れ物は無いのかと省みながら悠然と生きていきたいのだと笑う。